

フォーラム



大学院開設20周年記念 フォーラムの開催

奈良教育大学フォーラム実行委員会委員長
田淵五十生

ディネーターに、
四人のパネリス
トから具体的
な提案を受けた。

まず、現職教
員の派遣院生と
しての経験を持
つ小西和子氏(天
理市立福住小学
校・教諭)から、
例えば「LD児」
の概念卒など教
育事象を読み解
く新しい概念を

二〇〇二年十一月十六日、大学院開設二十周年記念フォーラムを開催した。テーマは、「子どもと学校のよりよい関係を築くためにー教員養成大学院の役割ー」というもので、現職教員、教育行政関係者、本学教職員、院生・学生など約百二十名が参加し、討議を深めることができた。

冒頭、教員研修に専門的に関わってきた横須賀薫氏(宮城教育大学長)から、「子どもたちの変容と教師の力量アップ」というテーマで基調講演があった。

趣旨は、大学院での研修は、民間教育団体や組合で行なう自主研修や行政研修とは異なり、学校現場や教師集団に依拠する「学校づくり」に貢献することに独自性があるのではないかというもので、あらためて学校や教育現場と大学院との連携の重要性が指摘された。

後半は、NHKの野村正育アナウンサーをコー

獲得して、行動療法など、具体的なスキルを学ぶことができたという報告が行なわれた。

次に、中尾勝二氏(奈良県立教育研究所長)から、「教育現場から実践上の課題や問題意識を持って研修に臨み、教育現場に還元できる研修や研究を行なうて欲しい」という提案があった。

引き続き、本学の池島徳大助教授から、「いわゆる開放制の大学と教員養成大学を卒業した教師の資質の違いは何か」が問われ「教師養成のプロ」に比べられる大学・大学院教育の内容づくりが求められている経緯が指摘された。

そして、最後に本学の八尾坂修教授から、「生涯にわたる職能成長過程において学び拓く教師、暦年齢にかかわらず、つねに前向きなスピリットを持った教師」が求められており、そのニーズに応える大学院教育、特に「教師と子どもの人間関係、教師による児童・生徒掌握の力量アッ

プ」に 대응することが、教員養成大学のアイデンティティではないかとの指摘がなされた。
コーディネーターの野村アナウンサーから「多くのシンポジウムの司会を経験したが、このようにたくさんの意見が寄せられたのは初めてです」というコメントが出るほど、多数の意見が出され、その大半は現職教員からのものだった。「県の南部にサテライトを開いて欲しい」という意見もあり、彼らの大学院での研修希望がいかに切実であるか痛感させられた。
「教育実践に寄与するような教育理論を実践の中からどう紡ぎ出すか」、そこに教員養成大学院の使命があるのではないかというのが、フォーラム終了後、主催者の抱いた実感である。



パネリストの方々(右から、中尾勝二奈良県教育研究所長、小西和子天理市福住小学校・教諭、八尾坂修本学教授、池島徳大本学助教授)